

介護施設における薬の経管投与に関する多職種連携のあり方について—簡易懸濁法・粉碎法を安全に行うために—

○大内 瑞子¹, 岸本 桂子¹, 福島 紀子¹(¹慶應大薬社会薬学)

【目的】近年、我国では人口構造の急速な高齢化と医療の著しい進歩により、胃瘻をはじめとする経腸栄養は高齢者の栄養補給に広く使われるようになってきた。今後は介護施設や在宅において、看護職員や介護職員が薬の経管投与および粉碎法、簡易懸濁法を行う機会は多くなることが予想される。しかし、情報が不足したまま薬の経管投与を行うことは、チューブの閉塞や過剰投与など思わぬ危険を生じる可能性がある。情報の不足や安全性の理解不足による事故を未然に防ぎ、安全な薬の経管投与を行うには、薬剤師による十分な情報提供と注意喚起を行う必要があるのではないかと考えた。そこで、介護老人福祉施設における看護職員と介護職員に対しアンケート調査を行い、粉碎法や簡易懸濁法を用いた服薬介助時に注意すべき薬に関する認識、疑問や不安などの現状について明らかにし、そこから、どのように薬剤師と他職種が協力していけば不安や疑問が軽減し、危険が回避できるのか、今後における多職種の協力のあり方について検討したい。

【方法】全国の介護老人福祉施設をランダムに抽出し、看護職員と介護職員それぞれを対象にアンケート調査を実施する。粉碎法および簡易懸濁法による投与時の疑問、不安の頻度を4件法と自由記述で問う。薬剤師との関わりと相談のしやすさについては5件法、注意すべき薬に関する認識や経験したことのあるトラブルについては具体的な内容の選択と自由記述で問う。

【結果・考察】今後、アンケート調査の結果内容を分析し、介護老人福祉施設における薬の経管投与に関して、薬剤師と他職種の協力のあり方について検討した結果を報告する予定である。